

「何だかわからないもの (le je-ne-sais-quoi)」の系譜学 —V. ジャンケレヴィッチを中心として

島村幸忠 (京都大学)

本発表では、フランスの哲学者ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch, 1903-1985) の鍵概念である「何だかわからないもの (le je-ne-sais-quoi)」を「美」や「魅力 (charme)」、「優美=恩寵 (grâce)」などの美的概念との関係から考察し、美学史におけるその意義を明らかにすることを試みる。

これまで「何だかわからないもの」が日本で論じられることはほとんどなかったが、17世紀以降の西洋美学史において果たしたその役割は決して看過されるべきではないだろう。この語は、いずれカントへと収斂していく近代美学の成立過程のなかで、主知主義的合理主義とは異なる態度を示すために用いられ始めたが、その際に「崇高 (sublime)」や「美」、「優美」、「魅力」などと結びつけられた。この語に対する本格的な研究は近年ようやく始められ、その代表的なものとしてリチャード・スカラーの『ヨーロッパ初期近代における何だかわからないもの』(2005年)やバンジャマン・リアドの『何だかわからないもの』(2012年)があげられる。ところが、彼らの研究の射程はあくまで近代に限られ、両者ともジャンケレヴィッチに言及してはいるものの、詳しく論じてはいない。本発表では、その系譜学上の欠落を補いつつ、そこにおけるジャンケレヴィッチの独創性を解明する。

「何だかわからないもの」をめぐるジャンケレヴィッチの思索を辿るには、『何だかわからないものほとんど無 (*Le Je-ne-sais-quoi et le Presque-rien*)』(初版は1956年、増補版は1980年に3巻本として出版された)を繙く必要がある。そこには、かつて「何だかわからないもの」について思考を巡らせた者たち、すなわち十字架のヨハネ、グラシアン、パスカル、ブール、ライプニッツ、モンテスキューなどの名が散見され、その語の持つ歴史を著者が念頭に置いていたことは明らかである。しかしだからといって、そこでの議論が彼らのものをそのまま踏襲しているというわけでもない。どちらかといえば、彼らの言説を自由に用いることで、独自の見解が述べられているのだ。そこで、彼らとの差異を明確にするためにも、ジャンケレヴィッチにおいては、「何だかわからないもの」に関する美的概念が「時間」を軸に捉えられていることに注目する。端的に述べれば、それらは時のもたらす効果であるというのだ。このような解釈は「何だかわからないもの」の系譜においてだけでなく、西洋美学史においても特異なものであり、そこにこそ、ジャンケレヴィッチ美学の独自性が読み取れるといえるだろう。